

巻頭言



国際会議の意義

矢島 敬 二†



IFIPの技術委員会(TC)7はシステムのモデリングと最適化を主題とするがヨーロッパの参加者が多い。2年ごとに国際会議が開かれているが、1985年にはハンガリーのブタペストで、昨年は東ドイツのライプチヒで開催された。そんなことで東欧の動きと会議で出会った人たちの顔とが重なりあう。

これだけ通信網が発達し学問上の情報がすばやく手にはいる状況のなかで、直接に参加者が報告を行う国際会議がいまさら必要なのかという疑問はないわけではない。ある友人が若いときに指導をうけたアメリカの学者は会議に出るくらいなら研究室で論文を読めといわれるのだといっていたことを思いだす。

会議の存在意義はもちろん学問上の情報交換にあるが、現実には人間と人間とのふれ合い、人間と社会とのふれ合いなど国際社会での生身の情報獲得が行われる。個人間の水準で国際的な相互理解が進展しても小さな影響力しかないかもしれないが、重要なことと考えたい。

1987年に東京で開いたTC7の会議はヨーロッパで開かれる場合と比較すれば小規模のものであったが、学会および関係した多くのかたの協力で無事終了できたことを嬉しく思う。

会議の開催を2年後にひかえてブタペストの会議ではできるだけ催し物に参加した。バスでの遠足はぶどう酒で有名なバラトン湖行であったが、指示のあった会議場まで参加者と待ってもバスはなかなか来なかった。それほど多くの参加者ではなかったが、辛抱よく待つのが印象に残った。けっきょくバスが待ち合わせていた場所の間違いということで40分ほどしてであろうか、無事出発した。

この種の行き違いは日本では避けられようが、頭の痛かったのは文化的な催し物であった。ハンガリーの

歌と踊りの夕べが開かれたとき、日本ではなにを見せてくれるのかとTCの前委員長から会場で尋ねられてどうしたものかと落ち込むのであった。

財源、参加者、そして論文水準の確保と会議担当者の仕事はいろいろあるが、そのうえ文化的な催し物となると手はまわらない。しかし、知合いを頼りに準備をして民族芸能らしきものの夕べをなんとかプログラムにもりこんだのであった。

いざふたをあけてみると、外国からの出席者はほとんど参加してくれ感謝されたのであったが、例外として学会事務局の一人が様子を見にきてくれたものの国内の参加者は皆無であった。もちろん外国でこの種の催しがあれば日本の人も参加するのであろうから、関心がないと結論することはできない。国内参加者がたいへん多忙であるためというのが妥当な解釈なのであろうか。しかし、外国でやった場合には主催国の参加者が予想されるので、多忙だけを理由とするのも片手落ちであろう。

西ドイツのビュルツブルグで開かれた会議の歓迎会をはじめ美術館に集まり、時間外の鑑賞を楽しんだのであったが、日本ではなかなか実現がたいことと思った。わが国には遠来の客を手厚くもてなすという伝統があるが、その内容がいつまでも同種のもではおかしい。すべての人が立派なホテル料理を高く評価するわけではあるまい。むしろ固有の文化や考え方を理解してもらう場をつくることが重要となろう。

情報処理の技術者が学校教育を終わったのちも、よく勉強することは誇らしいことである。しかし、技術者が社会においてより妥当な指導的地位を得ていくためには専門技術の勉強だけでは不十分である。技術発展が技術自身のなかではなく社会との関係において規定されていくことを認識すべきなのである。

(平成2年2月15日)

† 本会理事 東京理科大学